

2022年5月29日（日）

宣 教 「いつも共にいるイエス」

聖 書：マタイによる福音書28章16節～20節

今日の個所はマタイによる福音書の最後の部分で、復活されたイエスが弟子たちを新たに派遣する場面です。

◆弟子たちを派遣する

16:さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。

弟子たちは、生前イエスが語っておられた話を思い出し、ガリラヤへと戻りました。そして山に登りました。ガリラヤはイエス及び多くの弟子たちの故郷です。

弟子は12人ですが、イエスを裏切ったユダは自ら命を絶ちこの世にはいませんでした。11人は山に向かいます。この時そこには11人だけであったか、他にも弟子たちがいたかは分かりません。またこの山がどこなのかは、今日特定はできないのですが、イエスが山上の説教をされた丘ではないか、との説もあります。そうするなら山と言うより丘となります。イエスが「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。」と語られた場所です。現在ここには、その時の話にある8つの幸いのことばから、八角形をしたきれいな礼拝堂が建てられています。

わたしも訪問する機会があったのですが、ガリラヤ湖を眺めることのできる穏やかで美しい場所でした。今では世界中から多くの訪問者の祈りの地となっています。弟子たちはイエスとの様々な思い出を胸に秘めてやって来たのだと想像します。喜びと悲しみ、悲喜こもごも、とても懐かしい場所だと思えます。

弟子たちは、この山でイエスに会い、ひれ伏します。

「17:そして、イエスに会い、ひれ伏した。」とあります。

復活のイエスに会うのは、マタイではここが最後です。彼らはイエスにひれ伏します。これは、これから先の弟子たちの礼拝につながることであったと思うのです。ここから気づかされたことは、礼拝はイエスとの出会いの場所でありその時だということです。昔仕えていた教会に60歳を超えた知的な遅れを持つ教会員のからがおられ、その方から「先生、何で礼拝するん？」と聞かれたことがあります。ドキッとしたことがあります。肉体を持つわたしたちは、肉眼では地上を生きたイエスさま、復活のイエスさまを見ることはできませんが、心と思いを込めて礼拝する中で、イエスさまを近くに感じ、思い、「確かにここ

にいます。」と思うことのできる時があるのです。その意味で礼拝は特別の場所であり時だと思えます。礼拝者は特別の思いで礼拝に臨み新たにされるのです。

さて、その時「しかし、疑う者もいた。」と記されています。

短いことばですが、真実をつく刺すような言葉だと思えます。「疑う者」という言葉は、他の聖書の訳では「迷う者」と訳されています。「疑う・迷う」という言葉は、「二」という数詞を動詞にした言葉とのことです。心が二つの分かれている状態を表すと聞いたこともあります。あっちか、こっちか、たとえば、わたしたちでも人のことが気になり、「あの人は良い人だ」と思う時もあれば、時には「あの人はなんとという人だと」思ったりすることもあります。誰しも自分の心が二つに分かれ、時には迷って行くことがあるのではないでしょか。人生の道に迷うことも出て来ます。

そして取り返しのつかない危険に誰だって遭遇することもあるのです。

イエスの選ばれた12人の弟子たちにも疑う者がいたのだということを聖書は正直に伝えているのだと思えます。神を礼拝しイエスを拝んでいてもです。わたしたちの週ごとに捧げる礼拝の態度はどうでしょうか。疑う弟子たちのことを思うと、ちょっと安心もします。

しかし、愛なるイエスさまは、言ってみればそのような弱い心の者たちを承知の上で自分の弟子として選ばれたのです。神は決してお見捨てにはならないのです。ここに深いイエスの愛と神さまの選びがあったのです。神さまは強さではなく、むしろ弱さを用いてご自身の働きを進めていかれる方だということです。人間の強さは傲慢を生み、主にあっては弱さは謙虚さと交わりを生むのです。

18:イエスは、近寄って来て言われた。イエス自ら、弟子たちに近寄って来られたのです。疑う弟子にもです。そしてイエスは力強く語りかけておられます。言ってみれば宣言です。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。」

圧倒されそうな凄い言葉だと思えます。「天と地」神さまの創造された世界、宇宙全体を含めてです。ここには地球、生物、植物すべてが含まれています。コロナ禍前まで礼拝で告白していた使徒信条の最初にあることばを思い出しました。「わたしは、天地の造り主、全能の父なる神を信じます。わたしはそのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。・・・わたしは聖霊を信じます。」と続いて行きます。使徒信条は、聖書の内容を基本にして、キリスト教会が信じている事柄を短い文章でまとめた信仰の告白です。

プロテスタント教会は歴史的に西方カトリック教会の流れの中に誕生しましたので、多少の違いはあっても両者共に基本的には使徒信条は同じです。

聖書に戻りますと、神の子、イエス・キリスト（メシア・救い主）は神ご自身から十字架と復活の後、天と地の一切の権能を授けられたということです。ここには、イエスに対する神の優位性が告白されています。

ところで神が全能だということについては、今日様々な解釈や理解があります。

人類は歴史の中で悲惨戦争の歴史を繰り返して来ました。また大きな自然災害による苦難もあります。そんな惨い悲惨な現実の中で「神さまはどうして助けてくださらないか？」と問いたくなることもあります。また自然科学の発達や性差別の問題性などなど真剣で大切な課題が出て来ている時代です。しかし、言えることは、神さまは天と地を愛を持ってお創りになり、人間も造られ地を守るように、仕えるように求められとのだということです。

戦争は人間の罪が起こすのです。取り返しがつかなくなる故に戦争は起こしてはならないのです。多くの破壊的な自然災害の原因も人間によるものが多いのです。たとえ神さまが全能であることを理解することに難しさを覚えることがあったとしても、神さまは万事を益としてくださる方である。」ということを感じていますし信じて生きて行きたいのです。皆さまはどうでしょうか？

神さまの全能の愛と力は、独り子イエスの十字架の苦難の死と復活にあますところなく現れたのです。神さまは全能の神さまは、最も小さくなってくださったのです。

聖書に記されたイエスさまのことばは最後の力強い弟子たちへの派遣の言葉で閉じられ、いや将来に向かって開かれて行くのです。

19:だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。

い。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、

20:あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

このことばは、弟子たちにも、後の教会にも、今、主を信じるわたしたち一人一人にも語られたことばなのです。「あなたがたは行って、」教会の働きであり、キリスト者の働きです。イエスを中心にして、信徒たちが共に集まって祈りつつ、賜物をもって仕えて行く道が示されます。すべての民をわたしの弟子にしなさい。伝道の働きです。伝道は能力や効率ではなく、愛の働きです。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けることが勧められています。「名によっ

て、「よって」という言葉はギリシア語で「エイス」。これは「中へ」という意味があります、つまり「名の中に入る」ということ。イエスさまとの人格関係の中に入る、神さまとの生ける交わりの中に入るということです。それが洗礼、バプテスマの意味なのです。父と子と聖霊とは、神さまの三つの表れ方と言われます。難しいことばで三位一体ということば生まれ、教会はそう信じて来ました。

天と地の創造者なる神さまは、自らを父として、子なる救い主キリストとして、慰め主なる聖霊として現されたのです。これからです。神さまを父と表現するのは、今日において様々な意見があることも事実です。当時イエスさまは、神さまを呼ぶ時に、子どもが自分を守ってくれる父親を呼ぶ時に使っていた、親しみの言葉「アバ」「おとうちゃん」という言葉で呼ばれたと伝えられています。

そして、いよいよ最後にイエスさまは愛する弟子たちに言われました。

「20:あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

わたしは宣教を準備する中で、思い出したことがあるのですが、若い時から家族ぐるみでお世話になったドイツ人の宣教師で同志社大学でも教えておられたクラウド・シュペネマン先生が、昨年2月コロナ禍の中、83歳で天に召されました。お連れ合いは、今もご健在で社会的に活躍されておられますが、お名前はともみと言われます。彼女は若き日にアメリカに留学されお二人は出会われ結婚されました。

実はともみさんのお名前についてです。偕美の偕は「人偏に皆」と書きます。偕には、共にという意味があります。またこの文字は、名前には用いないとか。ですからこの字で偕美は極めて珍しい名前だと思います。名前には、その名をつけた親の思いが込められています。調べて見ましたら「偕老（カイロウ）」という単語がありました。古代の文書に出て来る「子と共に老いる」という意味のようです。聖書では、神が共にいてくださることを表しています。

何度かお聞きしたのですが、偕美さんは自分の名前に特別の思いを持っておられました。実は名前の由来は、今日の個所の20節にある。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」ということばの中の「共」であり、この言葉はマタイによる福音書1章23節のイエス誕生を予言した「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は「神は我われと共におられる。」の「共」なのです。ここからつけられた名前だとお聞きしたことがあります。

明治期に訳された文語訳の聖書を見ますと、「見よ、我は世の終わりまで常に汝らと偕に在るなり。」であり、「共」には、「人偏に皆」という文字があてられています。1章23節も同じ文字です。きっとご両親の思いの中でつけられた名前だと思います。姉妹は自分の名前から神さまがどんな時でもいつも偕にいてくださる、ということを受けとめ自覚して生きて来られたのだと思います。夫を天に送られた80代の歩みを、今でも前向きに生きておられます。

さて、この後、弟子たちは地上にイエス亡き後、迫害を受けて生きることになりました。しかし、「神共にいます。」という言葉と信仰とによって忍耐を持って、主にある希望を捨てることなく働きをなして行ったのです。わたしたちも同様ではないでしょうか。教会においても個人の生活においても神さまの憐みを受け主イエスの恵みに包まれて地上を生きて行くのです。この日からしばらくして、神の力である聖霊が弟子たちに降ったペンテコステ・聖霊降臨日を迎えました。教会のカレンダーでは来週6月5日がペンテコステの日と定められています。どんな時でも憐み深い神さま、いつも共にいてくださるイエスさま、愛と喜び、平和の心を与えてくださる聖霊を覚えて、洲本教会の宣教の働きに共に歩み出したいと願います。